

入れ歯（寺田寅彦：原文転記：青空文庫未掲載随筆）

入れ歯をこしらえた。

何年来食ったことのなかった漬け物などを、ぱりぱり音をたてて食うことができる。

はなはだふしぎな心持ちがする。

パンの皮や、らっきょうやサラダや、うどんや、そんなものでも、音をたてて食うことに異常な幸福を感じる。

歯のいい人は、おそらく、この卑怯な幸福を自覚する僥倖を持たないにそういない。

この幸福がいつまで持続するか疑問である。

たぶん一種の指数曲線か何かにしたがって、漸次的にゼロに向かっていくだろう。

こんな幸福があまり永続しては、こまることだろう。幸福も不幸福も、変化の瞬間が最高点で、それからあとは、大地震の余震のように消えていく。

そのおかげで、われわれは、こうやって生きていかれるのかもしれない。

★

入れ歯はやはり西洋人がこしらえはじめたものだろうと思う。

西洋食を食っているあいだは、めったに入れ歯の困難は起こらない。

ところが、茶漬けをかきこんだり、みそ汁を吸ったりすることになると、とにかく故障が起こりがちである。

いわんや、もちや、あめなどは論外である。

これは何事を意味するか。

入れ歯を発明し、改良してきた西洋人が、もしわれわれと同じ食べ物を食って生きているのだったら、そうしたらもちを食っても、あめを食っても、故障が起こらない入れ歯が、今ごろはできているのではあるまいか。

そうではないか、と思わせるだけの根拠は、ほかの方面にいくらでもありはしないか。

日本人は、日本人の生活を基礎にした文化をこしらえなければならない。

地震のある国は、地震のあるだけの建築をしなければならないし、もちをかじる人間は、もちをかじるような入れ歯をこしらえなければならないように、日本人は日本人の文化を組み立てていかなければならないのではないか。

もちは食わないことにすればいいかもしれないが、地震をなくすことは困難である。

いかにアメリカ人になりたがっても、過去二千余年の歴史は消されない。

(大正十三年七月、週間朝日)